曾祖母と「かなえおおはし」

宮城県仙台二華中学校２年　　井上　妃菜乃

三年前に亡くなった私の曾祖母は生まれも育ちも気仙沼だった。東日本大震災があった三月十一日、曾祖母は地震の後に津波が来ることを知らず逃げ遅れてしまったが、それに気づいた近所の男性におぶわれながら目の前の小学校に駆け込んだそうだ。校庭、校舎の一階には津波が押し寄せ、階段を上がって助かった。

それから何年かして、曾祖母は建て替えをしてまた同じところに住んだが、少子化の流れで小学校は廃校になってしまった。そして、その土地には災害復興住宅が建てられた。津波の高さを考えて七階建てに建てられ、その地区では定期的にそこで防災訓練をするらしい。曾祖母はそこで行われるイベントなどにも積極的に参加し、災害から守ってくれるだけではなく、地域のコミュニケーションが図れることに感心していた。

私は見慣れた風景が変わり、悲しく思っている人が多いのではないかと思った。しかし、曾祖母は恐ろしい記憶をアップデートするかのように新しい風景と暮らしを前向きに捉えて生きていたのだ。気仙沼をはじめ、被災地では津波で家が流され、住むところを失った人がたくさんいる。復興はまだ道半ばではあるものの、この災害復興住宅により、自分たちの安心して住める場所を手に入れられた人も多い。そして、避難先としての機能も兼ね備えていることで、その地区に住む人々に安心感を与えていることも確かだ。

私はこのような災害復興住宅はどのようにして建てられたのだろうと疑問を抱き、調べた。すると、被災地の復興の多くは税金が使われていることを知った。復興税は、正式名称は復興特別所得税といい、東日本大震災からの復興財源に充てるため、通常の所得税に上乗せして徴収されている特別税である。主な使い道は、防波堤や高速道路の整備、災害公営住宅の建設など様々だ。働いている国民の大半から徴収されていることを知り、全国の人から応援されていると思い感謝の気持ちでいっぱいになった。

今年の五月に、気仙沼の祖父母の家に行った。その時に祖母から「かなえおおはしに行ってみたら。」と言われた。青空の中に真っ白な「かなえおおはし」が見えてくると、思わず家族で歓声をあげた。この橋は東北最長に作られ、これにより、物流の効率化や交流圏の拡大、救急医療体制の強化などが期待されている。私は様々なところで復興税が効果的に使われているということを実感した。

これらの経験を通して私は、税金は国民が助け合うために大切な役割を果たすものだと感じた。曾祖母は復興していく故郷をしっかりと見て笑顔で旅立った。これからの将来においても、予期できない自然災害はたくさん起こるだろう。前向きに立ち上がる人々のために、人々が前向きに立ち上がれる社会にするために、納税は大切な仕組みなのである。